

古田史学の会・東海

# 東海の古代

第125号 平成23(2011)年1月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta\_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku\_tokai

## 2011年新年明けましておめでとうございます

会長 竹内 強

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、「古田史学・東海」では初めての試みとして、7月に開催された「愛知サマーセミナー」に会として参加しました。古田史学を多くの人に知ってもらう機会として、特に若い世代の人たち高校生などに知ってもらう上で、良い取り組みになったと思います。

一方、例年春と秋に行ってきた会員の「研究旅行」が中止となってしまいました。日程・旅行先を含めもう一度検討が必要なのかもしれません。今年は年始めから準備を進めたいと思います。

ところで、ちょうど100年前の1911年1月に大逆事件で幸徳秋水等の被告たちが処刑されています。この問題を古田武彦氏は昨年11月八王子市の大学セミナーハウスで開催された「第7回古代史セミナー」での講演で、「柳田国男批判—大逆事件についてよく知る立場であったが、このことについて一切語っていない。この年、『遠野物語』を刊行し「新たな国学」をつくりだした。」と話されました。

徳富蘆花（代表作『不如帰』）は幸徳等が処刑された10日後、旧制第一高等学校（現東大教養部）で「謀反論」という講演を行っています。ここで蘆花は吉田松陰の処刑から話を始めていき、大逆事件へと進め、彼等は国の政策に都合の悪いから事件をでっち上げられ殺されたと、怒りの熱弁をふるい、そして最後にこう結んでいます。

諸君、幸徳君らは乱臣賊子となって絞台の霧と消えた。その行動について不満があるとしても、誰か志士としてその動機を疑い得る。諸君、西郷も逆賊であった。しかし今日となって見れば、逆賊でないこと西郷のごとき者があるか。幸徳等も誤って乱臣賊子となった。しかし百年の公論は必ずその事を惜しんで、その志を悲しむであろう。要するに人格の問題である。諸君、我々は人格を研<sup>み</sup>ぐことを怠ってはならぬ。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/000280/files> 謀反論・草稿本)

最近、四万十市では市議会で大逆事件の被告となった人々の復権を行った。何が正しくて、何が間違いなのか。100年後にそれが証明される。古田史学もまたしかりです。

古田先生が『邪馬台国はなかった』を世に出してから40数年過ぎました。あと60年後には多元史観、九州王朝の存在が教科書に掲載される。これが実現するのであろうと確信を持ちつつ徳富蘆花が述べたように人格を研いで行きたいと思います。

# 法隆寺に関して

名古屋市 石田敬一

## 1 隠された十字架？

ずいぶん前の話になりますが、私が就職したばかりの4月早々に、職場の先輩からおもしろい本があるから読んでみないかと1冊の本を手渡されました。私が歴史に関心があることを知っていたことです。その本は、梅原猛著『隠された十字架—法隆寺論』（1972年、新潮社）でした。この本では、法隆寺西院伽藍の中門の中央に柱が立っているのは、子孫を殺された聖徳太子の怨霊を封じるためであるということが、くどいように何度も述べられています。しかし腑に落ちないところがあります。法隆寺は、一般的には聖徳太子が仏教を広めるために創建した寺院とされます。釈迦如来像、薬師如来像、阿弥陀如来像など多くの仏像が納められているのは、仏教信仰のためであることは自明でしょう。昨年の秋に国立博物館の法隆寺宝物館に収蔵されている多くの観音菩薩像等を見て、ますます仏教信仰の中心的な寺であるとの念が強まりました。ところが梅原氏は、これに対して法隆寺は聖徳太子の怨霊を封じるために再建されたといいます。寺を再建するのは、当初の目的を果たすためと考えるのが常識であり、再建時に目的が変わるといふ考え方には心底からうなずけるはずありません。

また、門の真ん中に柱があるのみで怨念を封じることになるのかどうかよくわかりませんし、怨念を封じるのであれば、むしろ開かずの門にすべきではないでしょうか。そして何も法隆寺を再建しなくとも、大仏の建造やお経を唱えるなど他にもお祓いの方法がありますので、梅原氏の考え方には無理があると思われま

す。どこにあるのかよくわかりませんが、梅原氏は法隆寺には十字架が隠されているといいます。それがどこにあるのか明確になっていません。本来仏教やキリスト教は霊そのものを認めないはずなので、私は怨霊論はありえないと思います。

## 2 法隆寺再建

法隆寺再建については、近年の発掘の成果で現在の南大門の東側に四天王寺様式である南北軸方向に五重塔と金堂が配置された寺院跡が発見されており、これにより、現存の西院伽藍より以前に若草伽藍があったことがわかっています。梅原氏の聖徳太子の怨霊封じとか聖徳太子がキリスト教信者という話にはうなずけませんが、梅原氏が法隆寺再建を前提に法隆寺論を展開したことは、評価に値すると思います。

『日本書紀』卷二十七に「夏四月癸卯朔壬申夜半之後 災法隆寺 一屋無餘」（天智天皇9年、670年4月30日に法隆寺は焼失し一屋余すところなかった）という記事があります。

この『日本書紀』の記述に従えば、法隆寺は一屋も残らず全焼したと考えられます。つまり、現存の法隆寺は、若草伽藍あとに再建された建物だと考えられます。

また、次の(1)～(4)のとおり平安時代に書かれた『七大寺年表』や『伊呂波字類抄』などには、和銅年間（708～715年）に法隆寺が建てられたとあり、670年の被災後、しばらくたって和銅年間に法隆寺は再建された可能性が高いように思われます。

- (1) 和銅元年戊申、依詔造太宰府觀世音寺又作法隆寺。（『七大寺年表』）
- (2) 法隆寺七大寺内和銅年申造立。（『伊呂波字類抄』卷二）
- (3) 和銅元年戊申、建法隆寺。（『南都北郷常住家年代記』）
- (4) 和銅三年藤公建興福寺或記云法隆寺同比年建立。（『東寺王代記』）

従って、発掘調査からも文献上も、法隆寺は再建されたことは間違いないようです。

そして、西院伽藍の建築については、細部の様式や年輪年代測定法などから、金堂がもっとも年代が古く、五重塔がそれに続き、中門、回廊はやや遅れての建築と見られています。

ところが、法隆寺の部材に670年の火災以前のものがあることから、火災以前に再建されていたとする主張があります。この主張は全く

問題になりません。これは木造建築を知らない者の意見ではないでしょうか。

神社仏閣や在来木造建築においては、建築材料を1年以上乾燥させて、湿気で狂わないようにしてから使用することは常識です。最近は人工乾燥により強制的に木材を乾燥させてから使用することが多くなりましたが、人工乾燥が行われる近年までは、自然の力に任せて木材を乾燥する天然乾燥を行っていました。

天然乾燥から木材の利用までの間の行程としては、まず木を伐採すると切った元口を切り株の上に乗せ、林地から浮かせます。葉を付けたまま3ヶ月ほど放置し木材の中の水分を蒸散させる葉がらしを行います。これで木材の細胞外の水分の多くが抜けます。次に使う大きさより大きめに製材して、1年以上、太い木の場合は数年も天日に木材をさらし十分に木材の乾燥を行います。この間に木はねじれたり曲がったり暴れますが、これ以上暴れなくなったところで、再度製材して所用の大きさにして利用します。こうした製材、乾燥の行程を2回繰り返す場合もあります。最終的には建築現場で大きさが合うように部材を削って調整します。つまり伐採してから実際に木を建築材料として使用するまでには数年かかることがまれではないのです。

特に法隆寺のように大きな建築物については、小さな狂いの積み重ねが全体に影響を与えるので、寸法が狂わないようにしっかり乾燥してから木材を使用する必要があり、乾燥には十分な期日かけたことと思います。

670年の火災以前に伐採された木材はあらかじめ法隆寺の火災を予見して用意されたものではもちろんありません。ただ、乾燥して保管されていた木材を火災後の再建に利用したとすれば、伐採時期と再建時期の関係が木材乾燥の行程から考えて、ぴったり一致するように思います。これが他の建物で使われていた古材を再利用したと考えるても時間的な矛盾は生じません。消失する時期を消失前から予想することはできませんので、法隆寺の五重塔の芯材に使われた木材は法隆寺の五重塔のためではなく、別に用意されていたということになりましょう。

### 3 法隆寺創建

それでは、次に創建はいつの頃になるかというのですが、これは通説では607年ごろと考えられています。

これに関して重要なことは594年に伐採されたとする五重の塔の芯柱です。

再建が670年であるとする、法隆寺再建のために76年も前の594年から準備や保管がなされた木材があったとは考えられません。伐採から再建まで、あまりにも間が開きすぎています。となると、これは別の寺院のために用意された木材や、他の寺ですでに使われていた古材を再利用したと考える方が無難です。当時は古材の再利用がかなり行われていたようです。たとえば、神宮式年遷宮では、20年ごとに伊勢神宮の建物が解体され他の寺で使われることは有名です。

法隆寺は通説通り607年に建てられたとすれば、先に説明したとおり木材の乾燥行程にかかる時間を考えると、594年に伐採された木材を607年に使用したことは時間的経過と齟齬を生じません。したがって、消失後の現存する西院伽藍は、同時期の古寺の解体材を再利用して再建されたものだと考えることも可能です。

たとえば、法興寺（現元興寺）は、710（和銅3年）年の平城京遷都に伴い移設されています。移設を行う技術があったということでしょう。

法興寺は、建設された時には、南門・中門・五重塔・中金堂・講堂と南から北に一直線に並び、五重塔の東西に東金堂・西金堂と3つの金堂が配置された飛鳥寺式といわれる壮大な伽藍でしたが、現在はお堂が一つあるのみで、平常遷都とともに養老2年（718年）に移設されて名前も法興寺から元興寺となりました。

さて、平成22年8月14日の朝日新聞の朝刊に、奈良文化財研究所の元室長が年輪年代測定法による建築部材の調査を行い、元興寺（元飛鳥寺）に現役最古の建築木材が使われていたことが判明したとの記事が載りました。その木材は586年頃に伐採されたヒノキです。

現存する世界最古の木造建築とされる法隆寺

の建物の中で、一番古い建築材料が五重の塔の芯柱で594年の伐採であり、そのほかの垂木などが663年のものです。これに対し、元興寺の建築材料は、法隆寺に使われた最古の木材より6年古いこととなります。飛鳥寺の創建は不明ですが『日本書紀』に590年に用材を伐採したことが記述されており、この記述と、この建築部材の調査結果はよくマッチしています。

また、薬師寺は天武天皇9年(680年)に奈良県橿原市から、平城遷都とともに現在地の西ノ京に移転したもので、本薬師寺、平城薬師寺双方の発掘調査により、両伽藍の建物の規模、位置関係などはほぼ等しく、本薬師寺の伽藍を平城薬師寺に再現しようとしたものと考えられています。

このように他の事例からも、現存の法隆寺は他の古材を利用して再建された可能性が高いと考えられます。

#### 4 古賀達也氏の指摘と米田良三氏の反論

妙心寺と観世音寺の銅鐘には次のように銘があります。

「**戊戌年四月十三日<sup>じんいん</sup>壬寅収糟屋評造春米連広国  
鑄鐘**」 妙心寺蔵(京都市右京区)  
「**上三毛**」 観世音寺蔵(太宰府市)

古賀達也氏は、『古田史学会報』49号(2002年4月1日)において「法隆寺移築論の史料批判—観世音寺移築説の限界—」として、『法隆寺は移設された』(新泉社、1998年)の著者米田良三氏の主張について史料批判されました。その中の一つに妙心寺と観世音寺の銅鐘鑄造年代の問題があります。

それは、米田氏が、妙心寺の銅鐘の銘に施された鑄造年次<sup>ほしゅつ</sup>の戊戌年を638年であるとし、様式差から観世音寺はこれよりさらに古いので、観世音寺創建年代を七世紀初頭とされたことに対する疑義です。

米田氏は、『法隆寺は移設された』で、次のように主張されました。

戊戌年<sup>ほしゅつ</sup>はこれまで文武天皇二年(698年)と読まれてきた。この時、観世音寺は解体されてすでに大和斑鳩の興留に積み置かれていた。九州の他の重要な建物も同様に解体されたと考えられ、新たに

寺の鐘が鑄られる状況ではない。戊戌年<sup>ほしゅつ</sup>は一回り前の干支である六三八年であろう。観世音寺鐘は観世音寺の完成した六一八年頃にはすでに製作されていたことは明らかで、妙心寺鐘は観世音寺鐘の約二十年後に製作されたことになる。製作年代の相対関係についての森氏の指摘は正しい。

(『法隆寺は移設された』125頁)

これについて、古賀氏は次のように批判されます。

妙心寺銅鐘には鑄造年次が戊戌と記されており、これは六九八年に当たる。ところが米田氏はこの戊戌年を六十年繰り上げて、六三八年のこととされ、それよりも古い観世音寺銅鐘は七世紀初頭の鑄造と主張された。しかし、この氏の判断は成立困難である。何故なら、妙心寺銅鐘には年干支の他に壬寅という日付干支があり、四月十三日の干支が壬寅となるのは通説通り六九八年であり、六三八年ではない(注5)。こうした基本的暦日理解が誤った上での米田氏の主張は成立しない。

注5 日付干支計算は『三正綜覧』による。

(『古田史学会報』49号 1頁)

これに対して、米田氏は、『法隆寺移築説の原点である観世音寺・考』(2010年5月31日、<http://abandjc-press.com/>)で、次のように述べられているようです。

『法隆寺は移築された』で述べたところですが、森貞次郎氏は「筑前観世音寺鐘考 —とくに唐草図文を中心として—」と題する論文で、次のように述べられます。

忍冬唐草文を持つ観世音寺鐘の製作年代は、その形成からみて妙心寺鐘にきわめて近いとされながらも、宝相華文をもつ妙心寺鐘よりも明らかに年代的に遡る形式である。

この両鐘はほとんど同一の企画によって同一工房において製作されたと述べられます。

妙心寺鐘の内側には陽鑄された次の銘がある。

戊戌年四月十三日壬寅収糟屋評造春米連広国鑄鐘

妙心寺鐘は筑紫の糟屋評造が造ったのであり、

観世音寺鐘には「上三毛」の陰刻があり、両鐘が（宇佐市の）上膳（かみつみけ）県の工房で造られたことが分かります。また工房が存続したのは日本（倭）国の時代であり、唐軍占領（664～672年）後の製作活動はあり得ません。観世音寺鐘が造られたのは607年で、妙心寺鐘が造られた戊戌年は定説の698年ではなく、60年遡った638年と思われます。参考までに、定説において698年の日付干支計算の根拠とされる『三正綜覧』は、科学的とは言い難い内容の代物と判断しています。

たしかに、<sup>さんせいそうらん</sup>『三正綜覧』（内務省地理局編、1880年）は、江戸時代以前の暦について、人為的に改暦が加えられ、誤謬もあると指摘されています。しかし、<sup>にほんれきじつげんてん</sup>内田正男編の『日本暦日原典』（昭和50年7月10日、雄山閣）によって改訂されていますので、これで確認すれば、「戊戌年四月十三日壬寅」は、間違いなく698年と確認できます。

『三正綜覧』は、科学的とは言い難い内容の代物と判断しています。」として、暗に古賀達也氏の主張が間違っているかのような言い方には問題があります。このように「戊戌年四月十三日壬寅」が698年であることは、『三正綜覧』とは別の暦日関係図書で簡単に確認できることは承知のうえだからです。

また「工房が存続したのは日本（倭）国の時代であり、唐軍占領（664～672年）後の製作活動はあり得ません。」というのは、米田氏の思いこみであって、妙心寺鐘に「戊戌年四月十三日壬寅」の銘がある限り、古賀達也氏の指摘は正しいといえましょう。

ここは、素直に古賀達也氏に従うべきと思います。

## 5 観世音寺古図に見られる私の疑義

『法隆寺は移設された』の口絵にある観世音寺古図は、観世音寺が再建される前の古図なのか、再建された後の古図なのか、はっきりしませんが、米田氏は、再建前のものと考えられておられるようです。米田氏はこの古図について口絵の下に次のとおり注釈されています。

絵は中門を入れて右手に五重塔、左手に金堂、正面に講堂を描いている。講堂の正面には座った

姿の三、四人が中庭を望んでいる様子である。絵全体を見ると、金堂の姿が貧弱に見える。観世音寺伽藍の本当の姿を描くことがタブーであったかのような、何か特別な制約のもとに描かれているように思われる。 （『法隆寺は移設された』43頁）

「金堂の姿が貧弱に見える」というよりも、金堂の屋根の形をしっかりと注視する必要があるでしょう。貧弱に見えたのは屋根の形や階層の違いにあるのではないのでしょうか。この古図の金堂の屋根は、宝形造の一階建てです。しかし法隆寺の金堂は、入母屋造の重層です。明らかに屋根の形や階層が違います。建物の基本的な構造が異なるとなると、そのまま移築したとする考えは、成立しないように思います。部材の多くを再利用したという考えであれば、まだ理解の余地があるように思います。

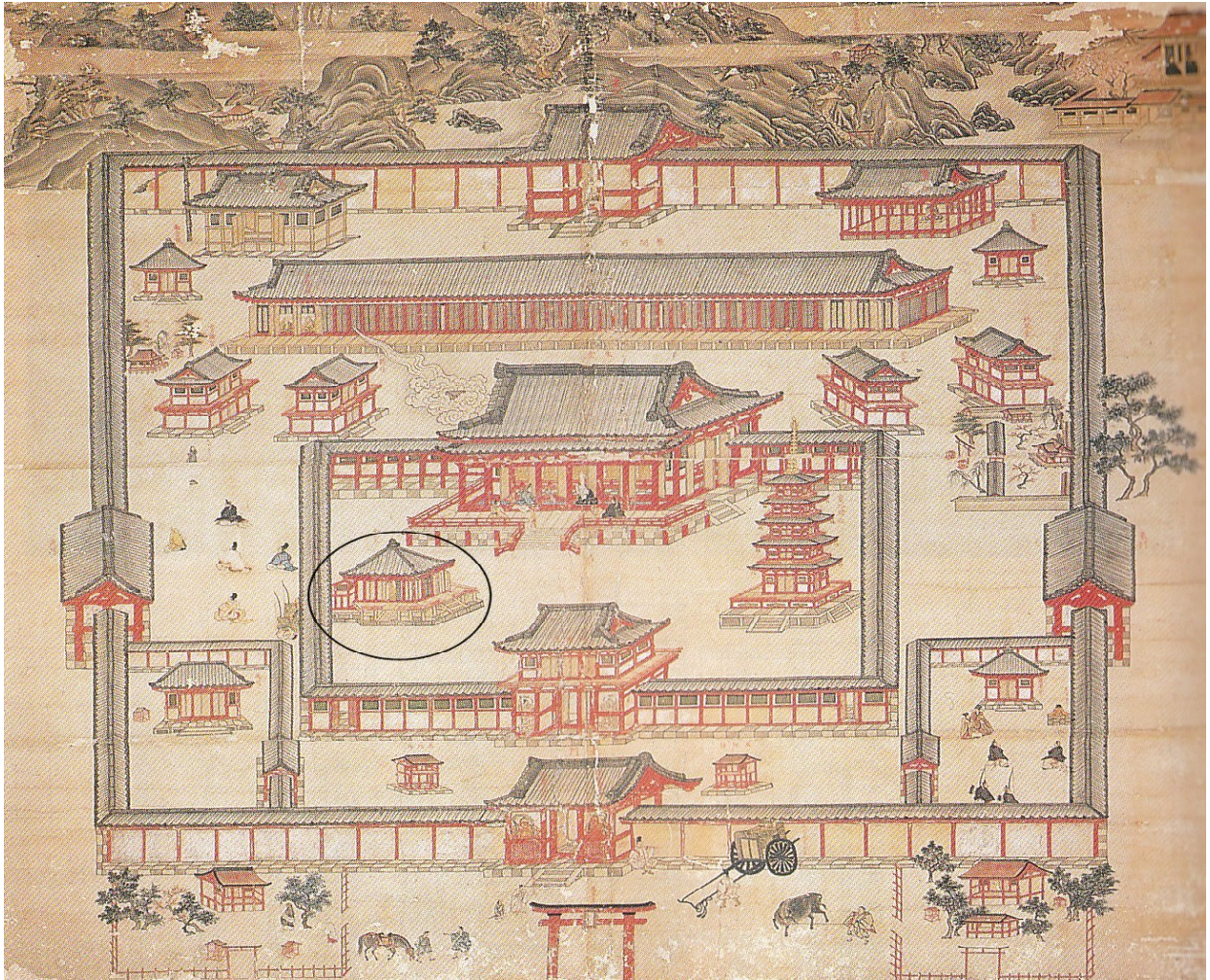
また、「観世音寺伽藍の本当の姿を描くことがタブーであったかのような、何か特別な制約のもとに描かれている」というのは、何をもち、そのように言われるのかがよくわかりません。

いずれにしても、観世音寺の移築とする米田氏の主張には問題があるように思いますが、浅野清著『昭和修理を通して見た法隆寺建築の研究』（1983年、中央公論美術出版）をもとに法隆寺移築論を展開されたことは、大いに評価されるべきことと思います。

観世音寺から移築された根拠は、やや乏しいものの、法隆寺移築論に投じた影響は大きいものがあります。

なお、古賀達也氏は、米田氏の移築推定時期が観世音寺や法隆寺の関連史料と一致しないことから観世音寺移築説を否定するとともに、移築元寺院として、“『二中歴』所収「年代歴」に見える九州年号とその細注は九州王朝の事績を記した貴重な史料であるが、その中に見える寺院創建記事は、先に紹介した白鳳の観世音寺と倭京二年に創建された難波天王寺の二つである。”として難波天王寺を寺院候補にあげておられます。難波天王寺は伽藍配置の史料が無く決定づけるまでにはいきませんが、候補を挙げたことに誠実さが伺えます。また法隆寺移築に関する議論を促すものと思います。

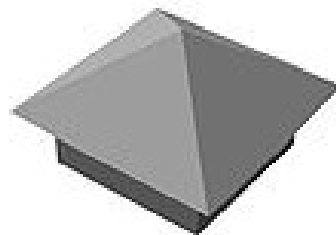
観世音寺古図 『法隆寺は移築された』より (金堂に印した○は筆者による)



法隆寺金堂



寶形造 (古図の金堂の屋根)



入母屋造 (法隆寺金堂の上屋根)



古図の金堂と法隆寺の金堂とは、明らかに屋根の形状が異なり、移築はありえない。

## 中国二十四史に記述されている 「倭・日本」を掲載している書物

瀬戸市 林 伸禧

### はじめに

古代の日本を知る上で、中国史書で記述されている古代の日本（倭、倭人、日本国）を知る必要があります。

これら古代日本を記述している中国史書及び中国史書のうち日本に関する記述を抜粋して掲載している書物を紹介します。

### 1 「倭・日本」を記述している中国史書を収録している書物

日本に関する記述をしている中国史書（二十四史等）とその中国史書を掲載している書物との関係を示すと表1のとおりです。

また、表1に掲載していませんが、中国史書（二十四史・新元史・清史）に「倭・日本」の語句が記述されていれば、関係記事すべてを収録している書物に『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成正史部（一）』（以下、「史料集成」という。）があります。ただし、「倭・日本」の語句にこだわり、「琉球」（「倭・日本」と記述されているのを除く。）及び日本に存在したと推定される「東鯨人、扶桑国」等についての記述は収録されていません。一方、白村江の戦いに関しては、例外として収録しています。

収録は原文（活字）のみです。なお、原文「倭」を「倭」と訂正して掲載されているので注意を要します。ただし、『三国志』倭人伝での「壹」、『隋書』倭国伝の「北」については、原文どおり「壹」及び「北」と掲載されています。

中国二十四史で、日本に関する記述及び日本に存在したと思われる国々について記述している史書の明細、「史料集成」に収録されている史書、及び、これらの現代語訳（又は、読下し文）を掲載している書物との関係を表にしたのが、「表2」（別紙）です。

また、これらの書物の発行状況、収録している中国史書及び関連文献をまとめて表にしたのが表3です。

### 2 「臺」、「倭」、「北」の取り扱い

古田武彦氏が、原文を改訂すべきでないと思われた、『三国志』魏志倭人伝での「壹」、『隋書』倭国伝の「倭、北」をどのように取り扱っているかを調査しました。

その結果は、表4のとおりでした。また、著（撰）者が表4とした理由は表5（別紙）のとおりです。

なお、中華書局本では『隋書』の「倭、北」を次のような理由により校訂しています。

・「倭→倭」（列伝四十六 東夷・百濟伝）

其人雜有新羅高麗倭等：「倭」原作「倭」。按、古從「委」倭從「妥」的、字、有時可以通用。如「桜」或作「稜」、「綏」或作「綏」。「倭」應是「倭」字的別體。本書煬帝紀上作「倭」。本卷和也處作「倭」者、今一律改爲「和」。

・「北→比」（列伝四十六 東夷・倭國伝）

多利思比孤：「比」原作「北」、據北史倭國傳、通鑑一八五、通鑑大業四年（※資治通鑑卷第一百八十一、隋紀大業四年條）改。下同。

（二十四史7『隋書』466頁）

この校勘記に記載されている校訂理由の一つとして、帝紀（煬帝紀）の大業四年・六年條には「倭、倭国」と記述されているからとされていますが、『隋書』にわざわざ「倭国」（東夷伝）と「倭国」（帝紀）と名称を変えて記述されていることから、「倭国」と「倭国」は別個の国と解釈できると思います。

また、『隋書』での「北・比」については、『隋書』倭国伝の倭王について（『東海の古代』87号〈平成20年9月〉）で発表しましたように、百衲本『隋書』東夷伝（影印）の「北・比」を抜き書きして字体及び「北・比」を含む文意から確認したところ、原文は「多利思比孤」ではなく「多利思北孤」でした。

表1 日本（倭、日本）を記述している中国史書を収録している書物

※1 上段：東夷伝などを記述している列伝。下段：帝（本）紀  
 2 △：原文（影印）、□：原文（活字）、○：読下し文、◎：現代語訳

区分	中国史書	日韓古代史資料	〔岩波文庫〕中国正史日本伝		東アジア民族史（正史東夷伝）		訳註中国正史日本伝	中国正史の古代日本記録	倭国伝	中国正史倭人・倭国伝全解釈
			1	2	1	2				
二 十 四 史	史記	□ --								
	漢書	□ --	□ --					□ - ◎		□ ○ -
	後漢書 (帝紀)	□ -- □ --	△ ○ ◎			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	□ ○ ◎
	三国志 (魏志本紀)	□ -- □ --	△ ○ ◎			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	□ ○ ◎
	晋書 (帝紀)	□ -- □ --	△ --			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	
	宋書 (帝紀)	□ -- □ --	△ ○ ◎			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	□ ○ ◎
	南齊書	□ --	△ --			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	
	梁書 (本紀)	□ -- □ --	△ --			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	
	陳書 魏書 北齊書 周書									
	隋書 (帝紀)	□ -- □ --	△ ○ ◎			-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	□ ○ ◎
	南史 (帝紀)					-- ◎		△ - ◎		□ ○ ◎
	北史					-- ◎		△ - ◎		□ ○ ◎
	旧唐書	□ --		△ ○ ◎		-- ◎		△ - ◎	□ - ◎	□ ○ ◎
	新唐書			△ --		-- ◎		△ - ◎		□ ○ ◎
	旧五代史 新五代史									
	宋史			△ ○ ◎				△ - ◎		□ ○ ◎
	遼史									
	金史									
	元史			△ ○ ◎				△ - ◎		□ ○ ◎
	明史									□ ○ ◎
その 他の 史書	通典					-- ◎				
	新元史		□				△ - ◎			
	明史稿						△ - ◎			
	清史稿						△ - ◎			

注 『史記』、『陳書・魏書・北齊書・周書』及び『旧五代史・新五代史』には、日本記録なし。



表 3

## 中国史書（二十四史等）を収録している書物一覧

書 物	著・編者	発行所・発行年月	中国史書等の収録状況
日韓古代史資料	漢・韓史籍に顕れたる 日韓古代史資料		
	太田 亮編	国書刊行会 復刻版：1972（昭和47）年 6月 初 版：1928（昭和 3）年 5月	中国史書（朝鮮・日本を記述している帝紀（本紀）・外国伝）及び韓国史書（韓国古碑、三国遺事一部、三国史記新羅本紀の任那・倭國関係）を収録、『古事記』での崩御年令及び崩御年干支を収録
中国正史日本伝	〔岩波文庫〕新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・『隋書』倭国伝 中国正史日本伝（1）		
	石原道博編訳	岩波書店、 新訂版：1985（昭和60）年 5月 初 版：1951（昭和26）年11月	『魏略』逸文、『広志』逸文、『翰苑』所引、高句麗広開土王（好太王）碑文及び『日本書紀』推古紀の抜粋の原文（活字）を収録。
	〔岩波文庫〕新訂 旧唐書倭国に本傳・宋史日本伝・元史日本伝 中国正史日本伝（2）		
	石原道博編訳	岩波書店、 新訂版：1986（昭和61）年 4月 初 版：1956（昭和31）年 9月	『元史』本紀・列伝、五代・宋代・元代の日本・日本人を記述している中国史書以外の書物、及び中国史書に関連ある日本の『日本書紀』等の史書等を収録
東アジア民族史 —正史東夷伝—	〔東洋文庫〕東アジア民族史1—正史東夷伝—		
	井上秀雄他訳注	平凡社 1974（昭和49）年12月	唐代以前のもの及び通典から、東アジア諸種族の列伝及び地理志・音楽志を抽出して、各種属・国家を中心として編集し、訳出（現代語訳）している。年表・官職表及び地図を添付している。『史記』から『隋書』までを収録。
	〔東洋文庫〕東アジア民族史2—正史東夷伝—		
	井上秀雄他訳注	平凡社 1976（昭和51）年1月	『南史』から『新唐書』までを収録 なお、『通典』は収録されていない。
訳註 中国正史 日本伝	石原道博著	国書刊行会 1975（昭和50）年8月	「中国正史日本伝日中交流史年表」を作成。
日本史料集成 編纂会編 正史之部 (-)	日本史料集成 編纂会編	国書刊行会 1975（昭和50）年12月	中国史書二十四史・『新元史』・『清史』のうち、単語「倭・日本」が記載されている記事を収録している。 倭国伝は全文、その他は関係文を掲載。 なお、琉球については掲載されていないものもある。
中国正史の古代日本記録	いき一郎編訳	葦書房 1984（昭和59）年11月）	『史記』・『漢書』の「徐福」関係を収録。 また、『旧唐書』劉仁軌伝、『通典』蝦夷を収録。
倭国伝	〔中国の古典17〕倭国伝		
	藤堂明保ほか訳	学習研究社 1985（昭和60）年10月）	『三国志』烏丸東夷伝・『隋書』東夷・『新唐書』東夷を訳出し、「使琉球録、使事紀略」が収録。「夷語付」・「日中交渉史年表」を作成。
	〔講談社学術文庫〕倭国伝—中国正史に描かれた日本—		
	藤堂明保ほか全訳注	講談社 2010（平成22）年9月	初版本から『使琉球録』、『使事紀略』及び「夷語付」を削除している。
中国正史倭人・倭国伝全解釈	鳥越憲三郎著	中央公論新社 2004（平成16）年 6月	語句の注釈のほか詳細な解説を記述。

表 4

原文「壹、倭、北」の校訂状況

区 分	中国史書	日韓古代 史資料	〔岩波文庫〕 中国正史日本伝		東アジア民族史 (正史東夷伝)		訳註 中国正史 日本伝	中国正史 の古代 日本記録	倭国伝	中国正史 倭人・倭 国伝 全解釈
			1	2	1	2				
二 十 四 史	三国志	□ — — 壹	△ ○ ◎ 壹 壹 壹		— — ◎ 壹		△ — ◎ 壹 壹	□ — ◎ 壹 壹	□ ○ ◎ 壹 壹 台	□ ○ — 壹 台
	隋書	□ — — 倭 北	△ ○ ◎ 倭 倭 倭 北 比 比		— — ◎ 倭 比		△ — ◎ 倭 倭 北 比	□ — ◎ 倭 倭 比 比	□ ○ ◎ 倭 倭 倭 比 比 比	□ ○ — 倭 倭 — 北 比

※1 『隋書』の「倭」又は「倭」を掲載している中国文献

- ・倭：百衲本、四部備要本。
- ・倭：四庫全書本、中華書局本
- 2 倭：『隋書』東夷一百濟・琉球国・倭国。『北史』百濟・倭国
- 3 多利思北孤：『隋書』倭国伝。多利思比孤：『北史』倭国伝
- 4 『中国正史の古代日本記録』では『北史』東夷の項目で「倭国」と記述。
- 5 『中国正史 倭人・倭国伝全解釈』では、原文を「多利思北（比）孤」と記述している。

## ばく えい かつ 莫 曳 皆 と 蝦 夷

知多郡阿久比町 竹内 強

前月号の本誌に、私は北方の民を唐は「蝦夷」（エミシ・カイ）と呼んだのではないかと、そしてそれらの人が東北地方・北海道のアイヌの人々やサハリンから大陸につながるひろく分布していた<sup>まつかつ</sup> 靺鞨と同じ文化を持つ人々ではないかと示唆しましたが、その後いろいろ調べる中でそうではないのではと考えるようになりました。

その一つは「古田史学の会・四国」の合田さんからの指摘です。

「北海道アイヌは大きな舟を持っていなかったので長い航海は出来ない。また、青森や東北の人たちとはまったく別の人たちだ」というのです。更に近所の理容院のご主人の話です。

「最近この近くで北海道展がありアイヌの人が木彫りの人形を実演販売をしていたのですが、その人が店に来たので頭を刈りひげを剃

ったのだがカミソリの刃がすぐにだめになった。あれは、東北の人たちとはまったく違う人たちだよ」

というものです。

菊池俊彦氏は「靺鞨と流鬼」によれば

<sup>ばくえいかつまつかつ</sup> 莫 曳 皆 靺 鞨 の居住地は北海道ではなく、大陸の日本海沿岸に求められ莫曳皆部はアイヌ民族ではなく、靺鞨すなわちトウングース系の民族だったと考えられる。またアイヌ民族がサハリンに移住したのは13世紀以後のことであるから、窟説部を樺太アイヌに比定することはできない。

また同様に白鳥庫吉博士が『流鬼』を樺太アイヌとみなすことによって、アイヌは唐時代に中国に知られ、アイヌを蝦夷の字で日本人にあらずして唐人であろう、という説は否定されなければならない。

また和田清博士は莫曳皆を北海道アイヌとみなし莫曳皆の『皆』はすなわち『蝦夷』の別訳であるかもしれないとして、北海道アイヌが唐から蝦夷と表記されていた可能性を示唆したが、この説も否定されなければならない。

すなわち7世紀にアイヌ民族がサハリン・黒竜江

經由で入貢し、唐朝にしられていたとする仮説は成り立たないのである。

(北方言語・文化研究会編

『民族接触・北の視点から』267頁)

こうした意見がありもう少し突っ込んで調べる必要を感じています。

## 1 2月例会報告

### ○ 中国史書に記述されている「倭・倭人・日本國」を掲載している書物

瀬戸市 林 伸禧

古代の日本を知る上で、中国史書で記述されている古代の日本（倭、倭人、日本國）を知る必要がある。

日本に関する記述がある中国史書とその中国史書を掲載している書物を紹介した。

また、これらの書物が、古田武彦氏が原文を改訂すべきでないと言われた、『三国志』魏志倭人伝での「壹」、『隋書』倭国伝の「倭、北」を、どのように取り扱っているかを報告した。

### ○ 阿久比<sup>くい</sup>の地名と蝦神

知多郡阿久比町 竹内 強

自分自身が生まれ育った『阿久比町』の「阿久比」という地名がどうして付いたか？。

これまでの定説を批判して、阿久比神社の祭神である「あきくい神」から北方の民「蝦夷」との関係があるのではないかと示唆した。

討論の中で「あぐい」の「ア」は接頭語で意味はないと説明したが、参加者から

「愛知・熱田・渥美など頭にアがつく地名がこの地方に多くあるので何か意味があるのではないか？」

と意見が出された。

もう少し研究してみたい課題である。

### ○ 「魏志倭人伝」の行路記事を洗い直す

半田市 土井真人

“魏志倭人伝”の行路記事を洗い直す”と題して女王卑弥呼の国の比定地への行路推定を試みました。その結果を報告しました。

平成22年10月の例会での林氏発表の資料として使われた平瀬英司氏著「ちやりんこ魏「使」倭人伝」論文の後半に示唆に富んだものがあると感じ、この論文に記されている内容をもとに、さらにいくつかの他説も踏まえ改めて魏志倭人伝の日本本土内行路記事を検証してみました。

平瀬氏の説で多くの説とほぼ同じなのは松廬国までで、その比定地は呼子または唐津としています。ただ、この先が違っています。東南陸行五百里をすなおに東南方向にたどって佐賀平野の方に向かっていきます。そして最終地点は筑後川南岸地域となっています。この説、かなり有力といいでしょう。しかしながら私は「ここに違いない」という決めつけはせず、曖昧なところは複数の辿り方をいくつかの可能性を示すにとどめておくこととし、最終的に4カ所を呈示しました。

行路は「松廬国」から先を推定した上で女王国の所在地として佐賀市近辺、熊本市近辺、鹿島市中心部、島原半島南端の津付近から天草島本渡市近辺と示しました。方位距離の誤差を勘案すれば吉野ヶ里も比定地の候補としておきました。

以上のように、行路に方位距離を素直に当てはめて進んだ結果を示し複数の比定地を挙げて、ここ、という決めつけは避けました。今後引き続きいろいろな文献にあたって検討を深めたいと思っています。

### ○ 戸と家

名古屋市 石田敬一

『東海の古代』117号（平成22年5月）の“安本美典著『邪馬一国はなかった』を読んで その3”で示した内容について、新たな視点を含め、次のとおりまとめて発表した。

なお、「大人皆四五婦下戸或二三婦」の読み下しについて、例会の出席者からアドバイスがあった。

- 1 アラブ首長国連邦は、イスラム教に基づく一夫多妻制であり、夫は4人の妻に平等に1軒ずつ家を与える。
- 2 『魏志倭人伝』に記述された「大人皆四五婦下戸或二三婦」の一夫多妻制は、大人が「戸」

主で、そのもとに4～5の婦人の「家」がある姿である。

- 古田武彦氏は「数」は、中核が「5～6」を表すと主張されている。これに対して安本美典氏は『魏志韓伝』の「凡<sup>およそ</sup>五十余国。大国万余家。小国数千家、総十余万戸」の記述で反論したが、「戸」と「家」を同一の単位と解釈するのは間違っている。
- 古田氏は『倭人伝を徹底して読む』の中で、「家」は「=戸プラス戸以外」であり「家」の方が「戸」よりも大きい概念とされたが、「家」が何軒か集まって「戸」があると考えたほうが適当である。
- 「大人皆四五婦下戸或二三婦」の記述で、「下戸」は「戸」主の下層に当たる名称として相応しいので、大人は「戸」主であるとする。
- 『日本書紀』の白雉三年四月是月條には「戸は皆五家で相保とす。一人長を為す。以て相檢察す。」とあり、「戸」は五つの「家」でまとめられる。<sup>およそ</sup>
- 『魏志韓伝』の「凡<sup>およそ</sup>五十余国。大国万余家。小国数千家、総十余万戸」の記述について「家」が4, 5軒集まって「戸」を構成している姿とするとピッタリ計算が合う。

## ○ 法隆寺に関して

### 名古屋市 石田敬一

話題づくりとして、法隆寺に関して気になっていることを述べた。

- 梅原猛著『隠された十字架—法隆寺論』(1972年、新潮社)について、聖徳太子の怨霊封じとか聖徳太子はキリスト教信者という話にはうなずけないが、法隆寺再建については理解できる。
- 『日本書紀』卷二十七に「夏四月癸卯朔壬申 夜半之後 災法隆寺 一屋無餘」などの記事とともに若草伽藍の発見で、文献からも発掘状況からも、法隆寺は創建時のままではないことが明らかである。
- 法隆寺の部材に670年以前のものであることから670年の火災以前の建立であったとする主張があるが、この伐採時期と再建時期の関係は木材乾燥の行程から考えて、まさに

一致する。古材を再利用した場合にも矛盾はない。

- 他の寺の事例から現存の法隆寺は他の古材を利用して再建された可能性が高いと考えられる。

## 1月例会に参加を

日時： 1月23日(日) ~~午後1時30分～5時~~

場所：名古屋市市政資料館(第1集会室)

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円(会員無料)

### 交通機関

- 地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- 名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- 市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- 〃 「清水口」下車、南西徒歩8分
- 〃 「市役所」下車、東へ徒歩8分

### 駐車場

- 名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- 鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料(40分200円)

### 今後の予定

2月例会：2月20日(日)名古屋市市政資料館

3月例会：3月6日(日)名古屋市市政資料館  
例会は、2月は**第3日曜日**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合は、「**20部**」をご用意します。

## 例会出席者へお願い

例会に出席される方は、「東海の古代」最新号を持参されるようお願いいたします。